

# ソリューションカンファレンス

## - システムコントロール -

星総合病院 続橋 順市  
杜の都産業保健会 鎌倉 克行

今回のソリューションカンファレンスは、東北放射線医療技術学術大会においては初の試みであり、システムコントロールの他にドーズコントロール、ワークフローコントロール、セーフティーコントロールのセッションが設けられており、各セッションにおいては活発な意見が交わされたと聞いている。

今回、私たちがコーディネータを務めたシステムコントロールにおいては、診療放射線技師における管理業務の在り方について考えるセッションであった。

我々、診療放射線技師における業務は通常の撮影や検査に加え、機器装置や付属品の管理等も求められている。しかしながら、勤務時間内には撮影・検査を行っているため始業・終業点検等を勤務時間外に行っている施設が多数であると思われる。

また、付属品の管理においては診療放射線技師の業務とはみなされず、担当者が苦慮している施設もあると聞いている。

このセッションにおいては、このような診療放射線技師の直接的な業務では無いが、必要とされる管理業務をどのように考えるかを2人の演者に述べてもらった

1人目の演者は部門管理者として管理業務をいかにマネジメントしていくかを東北医科薬科大学若林病院 伊藤道明氏。同氏はマネジメントとは組織における様々な資源や資産・リスクなどを管理し、経営上の効果を最適化し、高い目標を目指して組織を発展させ成果をあげる事としている。その中で同施設において行っている勤務・機器・放射線・危険管理について述べてもらった。

勤務管理においては勤怠システムを用いて電子的に行っているようである。現在は全ての勤務管理を電子的に行っていないようだが、今後展開していくものと思われる。

機器管理においては日常点検はRISを利用して行っているようである。問題となっていたのが装置の保守管理契約のようである。同施設では事務部から主要装置以外の保守管理契約の見直しを打診されたそうであり、この対応に苦慮したようである。結果的には病院と装置メーカーとの間に保守管理コンサルティング会社を入れる事により交渉を行わせ、現在も全ての装置において保守管理契約を結び、尚且つ以前の保守管理料より2割程度安価になったそうである。

これこそマネジメントであり、お互いの意見や主張を尊重しながらより良い方向性を導き出し、組織として成果を成し遂げた良い事例だと思われる。当院でも是非検討したいと考える。また同施設では、スタッフによるX線出力の計測を行っているようである。装置メーカーに任せきりではなく、自施設の装置を自身達で線量・精度を管理することは重要であるが、とても大変な作業である。この姿勢を私達は見習わなければならないと考える。

危険管理においては、月1回のKYTトレーニングと医師・看護師をまじえた造影検査のシミュレーションを行っているようである。危険となるものを事前に察知をし、対処することで危険を回避することは重要であり、日頃から注意深く物事や周りを観察することが大切である。また危険時での対処方法も重要である。しかしながら、このようなスキルは経験を積んでいかなければ蓄積されていかないと考える。そこで同施設のような日頃のトレーニングやシミュレーションが大事となってくる。

最後に、高度化する医療環境のなかで安全・精度・運用を担保するのには、組織内のシステムマネジメントを確立することが重要であり、そのためには組織のリーダーが固有技術だけではなく、管理技術を駆使して職場目標達成のために協働することが大切であると述べ、講演を終了している。

2人目の演者は、フィルムレス運用に伴う付属品であるモニタにおいて診療放射線技師の業務として管理を行っている星総合病院 阿部祐也氏。また、同氏は自施設の業務体系についても述べている。

同氏はまずモニタ管理の必要性を実態調査をもとに述べている。2014年のJARTおよびJIRAのモニタ品質管理に関する実態調査では、モニタによるヒヤリハットの件数は611件にもものぼったという。なかでも問題なのはモニタにより所見が異なったとした件数が107件もあったという点である。フィルムレス運用は院内のどこでも画像を観察できるというメリットがあるが、それが同時に危険な点でもある。観察するモニタ環境が違えばおのずと画像の印象も異なり、結果所見の違いにつながっていくからである。それを防ぐためにはやはり観察するモニタ環境を管理統一していくことが重要であると考え。また、同氏はモニタ管理者にも言及している。JESRAでは医療機関は医用モニタ品

質管理者を選定するべきとしており、その点において診療放射線技師はフィルム運用時代は自動現像機やシャウカステン管理を行い、フィルム濃度の管理に努めてきた経緯があり、診療放射線技師が医用モニタ品質管理者に適任であるとしている。

同施設のモニタ管理方法についても述べている。モニタ管理はPACS管理者5名で行っており、関連施設も含めて200台あまりのモニタを管理している。期間は毎年1月から3月の3ヶ月間であり、診療の妨げにならない午後休診の木曜日に行い、実施者には別日に代休が与えられる。使用日毎の全体評価試験は行えてはいないが、不具合時には対応できる体制をとっているとしている。

またモニタ管理において同施設では独自の工夫を行っている。1つ目はGoogleスプレッドシートを用いたデータ入力である。これを用いることにより、通信電波圏内ではリアルタイムに管理状況が把握でき、管理後のデータ集計が不要になることをメリットとしている。2つ目は輝度計固定具の開発である。輝度計においては経年劣化により接着面の粘着力の低下により計測中の輝度計の脱落が頻繁であったが、この固定具を作成したことにより脱落防止がもたらされ、尚且つ安価に作成できたと述べている。

次に同施設の業務体系についても述べている。この体系には、平成29年1月厚生労働省発「労働時間の適正な把握のために使用者が講ずべき措置に関するガイドライン」が背景となっているようである。その為、同施設では平成29年9月より施設全体で業務体系の変更を行ったとしている。

変更内容としては、従来就業時間前に行っていた始業点検をフレックス勤務を取り入れ、業務時間内としている。また施設全体や部内で指定された勉強会以外の参加は任意とし、参加状況を人事考課等の個人評価に用いないとし、指定された勉強会は業務時間内に行うか、時間外に行われたものは業務とみなしその時間分の早期退社が認められており、これらの時間管理には表計算ソフトを用いて管理職者が管理を行っているとしている。

通常においては始業・終業点検は業務時間外で行い、勉強会等も業務時間外に行っている施設が多数ではないかと思われる。その中で同施設は先述したガイドラインを遵守した先駆的な施設といえる。現在働き方改革として注目されているなかで、医療においてもその意識が高まってきている。このガイドラインを一度一読し、自施設で検討するのも有用ではないかと考える。

今回のソリューションカンファレンス システムコントロールのセッションでは、業務管理や撮影外の業務のあり方について2人の演者に述べてもらった。それぞれ施設の考え方や背景があり、一概に全てが参考になるとは思われないが、何かを考えるきっかけは作れたのではないかと考える。

このソリューションカンファレンスは、来年岩手県で開催される東北放射線医療技術学術大会においても継続予定のようである。来年も更なる活発なセッションになることを期待し、そして演者の2人の益々の活躍を願い、このシステムコントロール コーディネーター集約の稿を閉じたいと思う。